彼の秘密

綾瀬メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼の秘密

【Ｎコード】
Ｎ４４０８Ｖ

【作者名】
綾瀬メグ

【あらすじ】
新一の秘密に気付き始めていた蘭のお話。短編です。

―どしゃ降り。

空は真っ黒な雲に覆われ、遠くでは雷の音が聞こえる。
強い風に、校庭の木々がザワザワ揺れる音が響く。
もう8月だってゆうのに、夏服だと震えてしまうくらい肌寒い。

雨が強く降れば降るほど、世界が霧に包まれて見えなくなるほど、
いま自分は一人なんだと強く思い知らされる気がした。

―彼の秘密―

部活を終えて下駄箱に着くと、台風のせいでひどい天気。
”夕方から豪雨になります”
とゆう天気予報を見て準備した傘を、玄関に置いたまま出掛けた事
に気づいたのはたった今だったのだ。

「…忘れた。」

私は廊下の窓から空を見上げ、止むどころか強さを増す雨にため息をつく。

…濡れて帰るのもいいか。何故か今日はそんな気分だった。

ローファーに履き替えながら視線を玄関に向けると、何か青い物がチラリと見える。
それが何かを理解する前に、胸がギュッと締め付けられるのを感じた。

何となく、本当に何となくだけど。私はそれを予想していたのかもしれない。

「…コナン君？」

「…あ。蘭、姉ちゃん。」

そこには、青い傘をさしたコナン君が立っていた。

「ど…どうしたの、コナン君？
何かあった？」

すぐに駆け寄り、小さなコナン君と目線が合う様にしゃがみこむ。
彼は少し驚いた顔をした後、優しげに笑ってみせた。

「何って…コレ。」

「え？」

コナン君が差し出したのは、家の玄関に置いてあるはずの水玉柄の傘。

「忘れて行ったでしょ？
学校の帰りに凄い降って来たし、渡しておこうと思って。」

「じゃ、じゃあずっと待っててくれたの？もう１９時だよ？」

「…もうそんな時間？」

彼は腕時計を見て、時間を確認する。その仕草は、何となく気持ちが入っていない”見たフリ”の様に見えた気がした。

「今日、博士との約束してたんでしょ？大丈夫？」

「うん、まぁ。
今から行くから途中まで一緒に帰ろうよ。はい、傘。」

「あ、ありがとう。」

渡された傘を受け取った時、コナン君の指は冷たくなっていた。
小学校が終わって、すぐここに来ていたとしたら2、3時間は待っていた事になる。

この傘を渡すためだけに、ずっと待っていてくれたの？
携帯に連絡くれれば…とゆう私の言葉に「部活の邪魔しちゃうかと思って」と、彼は笑顔で答えた。

コナン君は不思議な子だった。
出会った日から、ずっと。

私が困っている時にはいつも助けてくれるし、危険な目にあえば真っ先に駆けつけてくれる。
それが危なっかしくて辛くなる時もあるけど、どこか嬉しく感じてしまう自分もいた。
まるで”彼”のように傍に居てくれる、小学生の男の子に。

「いつも本当にありがとね、コナン君。」

彼の頭をぽんぽん、と撫でると、コナン君は少し照れた様に顔を赤くする。
そんなところは妙に子供っぽかったりして、無性に可愛く感じた。

少しでも感謝を伝えたくて、小さな彼の手をとる。

「袖、濡れちゃわない？」

「いいの。さ、行こう？
博士の家まで送るから。」

――――

「ただいま。」

呟いても返事はない。

出迎えるのは真っ暗なリビングと、留守電の明かりが光る固定電話。

留守電のメッセージは、今朝依頼人に会いに長野へ出掛けたお父さんから。
台風の影響で高速が塞がってしまい、今日は帰れない、とゆう内容だった。

冷蔵庫を開けると、お父さんの為に作っておいた夕飯がそのまま置いてある。
部活で遅くなるからと、今朝早起きして作っておいたんだ。

今日は一人、か。

小さい頃は一人の夜が怖くて、ぬいぐるみを抱いてしか眠れなかった。
泣いてばかりで、だけど誰にも寂しいって言えなくて。
それは、今も変わってないのかもしれない。

電気も付けないまま自分の部屋へ行くと、何となく食欲もなく、制服のままベッドに倒れ込んだ。

私は、自分でも人より”孤独”に敏感だと思う。

両親が別居してからは一人で過ごす日も増えて、それまで以上に夜が怖かった。

それでも「彼」が居たから、笑顔で過ごす事が出来たのに。

「…しんいち。」

幼馴染みの笑顔が浮かぶ。
いつから一緒に居たのかも覚えていない位、自分の一部の様な存在である彼も、今はどこに居るのか分からない。

名前を呼ぶと涙が溢れてくる。

それとほぼ同時に、突然携帯が鳴った。
着信相手を確認した私は思わず目を見開いた。

「…やだ、聞こえてたの？」

『え？何が？』

「…こっちの話。」

『何だよ？』

携帯の向こうから聞こえる彼の声は、実際に会って話す時より優しい気がする。
きっと、いつもこんな風にタイミング良く電話してくるから。
寂しい時には何故かいつも。

『ふーん…今日一人か。』

「そうなの。お父さんは台風で帰って来れないんだって。
コナン君は博士の家に泊まるみたいだし。」

”寂しいって言ったら、会いに来てくれる？”

何となく、そんな冗談もいつの間にか言えなくなってしまった。

『じゃあ蘭の事だから、今頃泣いたりしてたんだろ？』

「…そんな訳ないでしょ。新一のばか。」

他愛のない世間話を続けながら、泣いていたのを気づかれないように振る舞うつもりだった。
いつも、感の良い彼には通用しないんだけど。
それでも私は、本当の気持ちは言わなかった。

新一は気遣ってくれるけど、だからと言ってここへは絶対に来ないし、私も彼の居場所や居なくなった本当の理由も聞かないと決めているから。

彼の”秘密”がそうさせる。

隠し事があればある程、心を開くのを拒絶してしまうのに。
もし仮に、それが私を気遣う優しさだったとしても。
新一も、それには気づいているのかも知れない。

『…、』

「え？」

『いや…何でもねーよ。じゃあな。』

「…うん。おやすみ。」

電話を切ると自然とため息が出て、枕に顔を埋める。

…寂しい。
優しくされるほど。

待ってろってどうゆう意味？
あの時の”大事な話”って何だったの？
一方的に携帯を渡して、たまにしか連絡くれなくて。

新一の気持ちが分からない。
中途半端に優しくされる位なら、構われない方がマシなのに。
期待して、もしも無駄だったらと思うと怖くて仕方ないのに…

”…好きなんかじゃないもん。あんな勝手なやつ。”

そう自分に言い聞かせないと、いつか心が壊れそうな気がした。

――――

…カタン。

小さな物音に、目が覚める。
新一と電話した後、あのまま眠ってしまったみたいだ。
寝転がったまま窓を見上げると、相変わらず物凄い風と雨。
さっきの音もきっと風の音だろうと思った。

…タン、タン…

…ん？

これは、足音？

携帯で時間を確認すると、２３時を過ぎている。

コン、コン。

私の居る部屋を、ノックする音。
一瞬、体が強張る。

ゆっくりドアが開けられ、眩しい明かりに思わず目を細める。

「…あれ？」

逆光だったのと突然の出来事だったのと。
さらにその人影が、想像してたものより小さい事で頭が回らなかった。
理解するのと同時に、言葉に出来ない感情が込み上げる。

この、雨の中を帰って来たの？

”…どうして？”

「博士の新しいゲームで遊んでたんだけど、皆寝ちゃって暇だったから帰ってきちゃった。
…起こしちゃってごめんね。」

「…コナン、君…？」

そう言って笑うコナン君の服はびしょ濡れで、きっと傘なんか役に

立たなかったんだろう。
そんな理由でこの台風の中、帰るなんて普通は思わない。
さっき感じた感情が体の中を駆け巡る。
でもまさか、そんな事ありえない。
私はぽかん、と彼を見つめるしかなかった。

「…蘭姉ちゃん？
とりあえず僕、着替えてきちゃうね。それから…」

何故かコナン君は赤面しながら目を反らす。

「ら、蘭姉ちゃんも早く着替えた方がいいと思うよ。」

「へ？」

返事を待たずにコナン君は行ってしまう。
私は何の事か分からないまま視線を落とし、一瞬で意味を理解した。

「わ、わっ！やだ…！」

しわくちゃになった制服。
シャツのボタンは胸元まで空いちゃってるし、おまけにスカートは

捲れてるしで散々の格好だった。
一気に恥ずかしくなって、顔が赤くなったのが自分でも分かる。
今まで例えこんな姿を見られたって、彼と一緒に寝たりしたって平気だったのに。
だって、彼は小学生だから。
本当の弟みたいに思っていたから、変に意識なんてした事なかったのに。

――――

「こんな時間に帰ってくるなら迎えに行ったのに…」
部屋着に着替え終わった私は、先に着替えてテレビを見ていた彼に話かける。
何となくさっきの事が気まずくて、後ろから声をかけた。

「平気だよ。近所だし。」

コナン君はテレビから目を離さずに答える。何となく彼も気まずいんだろうか、と思った。

でもよく考えなくても、コナン君って妙に大人びてるけどもちろん子供で。
それなのに、何で今になって変に意識してしまうんだろう。

さっきから心の奥にある感情の正体。きっとそれが答えなんだと思う。

何となく、私は彼の向かい側じゃなく隣に座った。

「…それもあるけど、そうじゃなくて。いくら近所でも、こんな台風の中帰って来るなんて危ないでしょ？」

「…うん。”いつも、心配かけてごめん。”」

問い詰めると、コナン君は今度は真っ直ぐ私の目を見て答える。

「でも、何となくだけど蘭姉ちゃんが泣いてるんじゃないかと思ったから。」

「…え？」

「…泣いてたんでしょ？目、少し腫れてるよ。」

「ど、どうして…」

どうして分かったの？
そう聞く前に、コナン君は続ける。

「わかるよ。」

彼はとても優しい、でもどこか悲しい笑顔をうかべる。

「…蘭姉ちゃんは、それが何でだか分からない？」

本当は、何となく気づいてる。きっとコナン君も、その事を言っているんだと思う。

コナン君と、新一。
”彼の秘密”。

でもとても現実的には思えないその憶測はいつも浮かんでは消えていって、何度か問い詰めた時も上手く誤魔化されてしまって。

「わ、わかんないよ。」

だから口にするのも恥ずかしくて、私は彼から目を反らしてしまう。

「…そっか。」

本当は、彼も分かってるんだと思う。
私が彼のついている様々な嘘に何となく気付いている事。
そして私も分かってる。
彼も自分からは真実を告白出来ない事。

近いのに遠い私達の距離。
踏み込めない一歩が高い壁になってお互いの気持ちが見えない。

”ごめんね”と、コナン君はまた私に謝った。

その言葉を聞いて、お互いにもう限界なのかもしれないと思った。

…その瞳は、聞いてほしいっていうことなの？
私は、聞いてもいいのかな？
今度こそ、誤魔化さずに全てを話してくれるの？
だけど、私だって怖いよ。
貴方の考えてる事が全然分かんないんだもん…
どうしてそんな、優しくて…今にも泣きそうな瞳でみるの？

「な、泣いてるの？」

「ちっ…違うわよ。泣いてなんか…」

自分でも止められないくらい、ポロポロと次々流れ落ちる涙。
拭っても拭っても止まらない。

「…蘭…姉ちゃん。ごめん。
いつか必ず、ちゃんと全部話すから。」

いつもとは違うトーンの声が、優しく響く。
やっぱり、そうだ。
”彼”は……

「だから、」

突然目の前が暗くなって、暖かい体温を感じる。
小さな体のコナン君は立ち上がって、座ったままの私をぎゅっと抱き締めていた。

「…泣くなよ。」

私は、もう聞かなくても確信していた。
隠された真実。

そして、”彼”の気持ちも。

だからいつも、貴方は傍にいてくれたんだね。
辛くて仕方ないのは私だけじゃなくて、きっと彼も。
私も彼の背中に手を回して、今度は素直に呟いた。

「…うん。ありがと。」

でも少し、イジワルしてもいいよね？あの日の約束通り、ずっと待ってるご褒美に。

「…でも、どうして分かったの？さっき、泣いてたって。」

「え？」

「”わかる”って言ったよね？」

顔は見えないけど、彼の体温が少し上がった気がする。

「…わかるよ。
”１０年以上”ずっと蘭だけ見てきたんだから。」

そう言った”７歳のコナン君”は、またぎゅっと私を抱き締めた。

大丈夫、私は待てるよ。
貴方がこんなに傍に居てくれてるって、分かったから。
貴方から話が出来る日がくるまで、何も聞かないよ。

たった一つだけ、伝えてくれた気持ち。それだけで、何十年だって待っていられる。
これからは私も、強がらずに素直に伝えるね？

”…すきだよ。”

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4408v/

彼の秘密

2011年10月9日11時45分発行